

言語に於ける《意味》について

— 人間学的考察 —

両 角 克 夫*

(信州大学文理学部)

第二篇 意味の美学

I 言語とその美学

言語は一般に、音声と概念との結合したものと考えることが出来る。従つて言語芸術としての文学作品を美学的に扱う場合、音声と概念との二面から考察することが出来る。歴史的に辿ると、言語の音声に関する美学は、韻文に於ける metrics として発展して来た。古典的定形詩から、無韻詩、更に自由詩(vers libre)を経て現代の散文詩に至るまで詩人は言葉の響きに神経質でなくてはならなかつた。然し言語に於ける音声は感嘆詞などの場合をのぞき、必ず概念と結合している。否、むしろ音声は概念を盛る器であつて、独立した存在とは云えない。E. A. Poe は“Letter to B”の中で、Music, when combined with a pleasurable idea, is poetry…………と云つているし、又象徴派の詩人達は詩の音楽性に意を注いだ。然し詩が言語を媒材とする限りその音楽性には限界がある。例えば言語に於ける聴覚的なものは、夫々の国語に於て限られている子音と母音が、単線的時間の流れの中に於て、前後に組合されていくものであり、ここで重要なものは音色(timbre)であつて、accent, intonation を含むとしても、音の高低、リズム、などに対する厳密な規定も、複雑な変化もなく、又旋律は見られず、コーラスを除いて、横にひろがる同時的和音の効果を期待することも出来ない。従つて、歌謡やオペラの場合とはかくとして、詩や散文の朗読を耳にしてもその概念的意味を理解出来ぬ場合、その作品を味わつたことにはなるまい。言語に於ける聴覚的な音声は概念的意味と結合し、むしろその概念の感性化に役立つ場合にのみ、自らの表現価値を得るのである。それに現在では、散文は云うまでもなく、詩に於ても、朗読によつて耳に訴えるよりも、白紙の上に特殊な形に排列された文字を眼で辿り、心で読みとることによつて、読者に適した速度でその意味の含蓄を味わつていく作品が多くなつている。又、言語に於ける音楽性とは、純音楽的な要素ではなく、むしろ音楽が喚起する心理内容、即ち音楽的效果を目ざすものと解すべきである。音楽的效果とは、Poe も云つている如く無限定(indefinite)な心的状態であり、言語に於ける概念の結合が、論理的確定的でなく、時間の中で流れていく無限定な意識状態を暗示するものである。結局、文学の世界は言語を媒材としている限り、音声や文字を記号として表現される概念を媒介とし

* 信州大学助教授

註：本篇は、第一篇(信州大学紀要5号)《意味の形成》の続篇をなすものであるが、独立したものとしてみてもさしつかえない。

てのみ成立するものと云えよう。概念こそ言語の本態を形成するものであつて、言語に於ける意味又は主体的関心は、概念を通じてのみ複雑な自己を現象化し伝達をとげるものである。文学の世界の中心は、Poeの所謂 a pleasurable idea であり、この idea とは作者の志向内容が概念を介して展開した意味の世界に外ならぬ。従つて、言語の美学は、この a pleasurable idea の内部構造に光をあてる努力であり、即ち意味の美学として成立するのである。文学を構成する文章の形態的考察が文体論を成立せしめるとすれば、その形態によつて限定され、又逆にそれを形成する作家の志向内容を、その創作の過程に於て辿るのが文学の意味論的考察である。従つて、意味の美学は、無形の主体的関心が現象としての言語表現に己を投入するその切面を問題の場とするものであつて、どこまでも主体としての言語行為者の側から問題に迫るものである。又、文学の理解ということも、結果としての作品を介して作家の創作の過程に参加することであつて、作品の観照によつて喚起される受動的感動の単なる記述と分析とに終つてはならぬ。

II 言語芸術の矛盾とその克服

言語は音声をとまなう概念符号を媒介とする意味体系である。作家が、かかる言語を用いて芸術作品を創作せんとする場合、その概念性、符号性、に大なる抵抗を感じるのは当然のことであろう。芸術は直観と想像力によつて制作され又感性を通じてそれらに訴えるものであるが、言語は概念を与えることによつてまず悟性に訴える。概念とは、それが経験的概念にせよ、科学的概念にせよ、思惟経済のために雑多な表象や事象からの抽象によつてはじめて得られるものに外ならぬ。従つて概念は個体的、具体的なものを直接に表現することは出来ない。従つて作家の表現せんとする意味内容は、言語表現に於ては、概念の抽象的悟性的通路を迂迴することによつて、その感性的なものを喪失する。Shillerもこの辺の事情について、1793年2月28日附の《Kallias書翰》に於て語つている。Kantも、その《判断力批判》に於て、「美しいものとは概念をはなれて普遍的な満足の対象として表象されるもの」(Das schöne ist das, was ohne Begriffe als Objekt eines allgemeinen Wohlgefallens vorgestellt wird)と云い、更に又「概念から快あるいは不快の感情への移行というものはないからである」(Denn von Begriffen gibt es keinen Übergang zum Gefühle der Lust oder Unlust)と云う。

言語を発生的に考える時、個々の語は単なる抽象的概念符号となる以前に於ては具体的な語感又は image を帯びていたと考えられる。従つて最も抽象的と考えられている語もその語源に溯つて考えると、かなり具体的な image を取り戻して来る。例えば、Heideggerは、Phänomenologieなる哲学用語をその語源に溯ることによつて具体的に把握し、これを自己の用語として新鮮なる意味内容を見出している(Sein und Zeit, §7)。よく言われる如く言葉は貨幣の如きもので、多年にわたつて広く流通すると、その刻印は何時しか磨滅して不分明になる。最初鑄造された時には鮮明であつた筈の刻印であるが。

概念の有する共通性、普遍性が實在に即応するものであるか、単なる思惟経済のため

に作り出された概括的符号にすぎないものであるかは、中世に始る realism と nominalism の論争に溯る興味深い問題ではあるが、同じ概念でも、その用い方により、連想によつて、具体的な心象 (image) を喚起する場合と、全くの抽象的記号に留る場合のあることは例をあげて説明するまでもないことである。文学に於ける言語の性格は前者であり、数学や科学に於ける言語の性格は後者である。そして、概念的符号的な言語を如何にして直観的具象的感觉表現にまで還元出来るかということが、言語芸術の中心課題であり、言語美学の出発点ともなる筈である。

次に言語のもつ概念性克服の方法の若干について、過去の文学作品からの帰納によつて考察を進めたい。

Ⅲ 比喩表現の意味

言語の概念性を克服する方法は、言語に於ける概念を具体的直観の方向に引き戻すことであろう。Bergson もその《哲学的直観》の中で云う。「体系が展開されるのは概念によるのであるが、体系をその出て来た元の直観の方向に引きしめるのは image に於てである」(C'est en concepts que le système se développe ; c'est en une image qu'il se resserre quand on le repousse vers l'intuition d'où il descend.) 換言すれば、一つの idea 又は個体的表象は自らを言語体系に於て展開するためには概念によらなくてはならぬが、その言語体系が全体としての統一を保ち、まとまつた印象を鮮明に喚起するためには、その体系の出た根源である一つの直観又は image の方向に集中されなくてはならぬ。多くの場合、論理的に構成された文章は、定義と呼ばれるものに於て見られる如く分析的であり、直観的に捉えられた主語概念に対して、述語はその分析であり説明である。かかる文章は悟性に訴えるものであつて直観に訴えるものではない。ここに直観に訴える言語表現としての《比喩》の生れる理由があるのである。

比喩にも様々な形態があり、最も簡単なものは直喩 (simile) である。「バラのように美しい」と云う表現は「大変美しい」と云う表現よりたしかに具象的である。更に進んでは、隠喩 (metaphor) がある。「人は考える葦である」の如き言語表現の永続性は、その隠喩の上手さにある。

比喩表現が、語句的のものから思考形態として現れて来たものが譬え話であり寓話である。これは一括して allegory と呼ばれてもよい。allegory は、言語表現に於ける概念的抽象性をさげ抽象的思想内容に具象的表現を与えるものであつて、古来、神話に、経典に、民話に、不断に見られて来たものである。一例をとるならば、旧約の《創生記》その他は allegory の傑作であり、福音書に於けるイエスは譬え話の名手であつた。あの有名な《蕩児》の物語り (ルカ XV : 11-32) は、抽象的説明では捉えることの出来ない《神の愛の性格》について、適確に具体的に且つ美しくその意を伝えている。かかる点からも、信仰の書である旧新約聖書は偉大なる文学作品としての不滅の美的価値をも内包するものである。allegory は、説明でも分析でもなく、画布の上に描くように、idea を提示 (represent) することであり、又暗示することである。ギリシヤ神話や Dante の《神曲》の魅力もその allegory の美しさに負つている。実に詩語の秘密は metaphor—image に、物語りや小説のそれは allegory に在つたと云つ

でも過言ではあるまい。

文学作品の無限の魅力となつている、あの感性にまで訴えて来る瞑想の味わい、含蓄の深さ、強き感動に節度を与えこれを洗練していく具象的思考のリズム、これらは暗示的な意味内容と意味形態に支えられるものであり、思考の帰結や決論ではなくして、不断に新しい思考への出発を喚起するものである。

比喩表現は、言語に於て最も効果的な表現形態の一つであり、それは概念の連想作用によるものである。「人は考える葦である」と云う場合、この葦は、<葦>が一般に内包し、連想として暗示する<脆さ>を具象している。然し「人間は脆い」と云う場合の<脆い>という概念は抽象的な属性概念であつて、分析的、没個性的、概論的である。然し「人は考える葦である」と云う場合は、葦の内包する<脆さ>なる概念は葦なる具体的事物概念のもつ様々な連想とからみ合つて、全体として個体的実在の姿に於て暗示されて来る。これが言語表現に於ける image であり、image は言語概念の連想作用を基として成立する metaphor, allegory などの比喩表現に密着し、抽象と具象、普遍と特殊、の結合に於て形成されるものである。語感はその語の連想作用によつて決定されるものであり、語の連想作用は、本来的な語意よりはむしろ、文脈や言語活動の場の特殊性に於て限定され色づけられる。ここには概念としての語意の浮動があり、論理的に厳密な表現を要する場合には欠点となると同時に、文学的表現に於ては、その可塑性、無限定性、感性的表現、暗示と象徴を可能にしている。

言語に於ける概念性、抽象性、の克服は将来様々な試みによつて新たな方法が見出されていくことであろう。又現代の優れた詩に於ては、空間、時間、重量、数、などの科学的専門用語や、哲学的形而上学用語が、新鮮な感覚内容を帯して用いられている。従つて語の感覚性とは、その語の表す概念の内容に規定されるものではなく、言語行為者の言語に対する感覚的把握能力、即ち言語を種や類を表す没個性的概念符号としてでなく、unique な表情をもつ<物>として捉える語感の鋭さによるものである。

現代の文学のもつ抽象性は、語のもつ従来の日常的連想を断ち切つて、語にひそむ内在的な感覚と意味を見出しこれを新たな連想に統合せんとするところから出発しているのであつて、決して抽象概念をもてあそぶものではなくして、概念の特殊化、感覚化への努力の表れでなくてはならぬ。一般に抽象的又は形而上学的と考えられているものの感性化こそ、所謂抽象芸術の魅力であつて、それは日常的因習的連想の中から、言語、空間、時間、心理を救い新たな直感的認識の世界を拡大していくことにすぎない。従つて文芸に於ける抽象の美は、普遍化、数量化、にあるのではなく、普遍の特殊化、量の質的限定、にある。換言すれば、現代の芸術家とは、現代の神話の制作者でなくてはならぬ。即ち機械化、一般化、没個性化、社会化、の中で生まれて来たあらゆるものの概念化に抗して、特殊化、内面化、の仕事遂行するものでなくてはならぬ。それは、意味化、主体化を志向するものに外ならぬ。

Ⅳ 着想 (Idea) とその展開

最初に引用した Poe の言葉の中の、a pleasurable ideaこそ文学作品の中核をなすものである。この idea とは作家の頭に浮んだ image であり、志向内容であり、即ち

着想である。然しこの着想は文学に於て自らを展開し具現するためには、単線的な時間系列に於て前後的に組合されていく概念の体系によらなくてはならぬ。着想としての idea は作品全体をしめくくる志向内容、即ち意味であるが、この意味は概念体系としての展開によつて自らの肉体を得るのである。従つて文学作品のもつ面白さは、idea そのもののもつ斬新さにあると同時に、その idea の展開の過程にある。idea を言語に於て展開せしめるものは、思考と想像力であり、思考は概念の論理的展開を、想像力は概念の直観的結合を可能にする。文学に於ては想像力がその中心活動をなすものであるが、言語そのものが概念体系を基盤とするものである以上、想像力は思考を離れてあり得ず、直観と思惟との結合に於て想像力を考えることが出来よう。idea の展開過程に於ける思考のバランスとリズムの美しさと強靱さは、たしかに言語芸術の支えである。文学作品に於ける文章を形成する思考形態は、直観的で、時間的空間的關係を表す判断であり、特に表象關係が時間的である所謂〈物語〉の形式をとることが多く、これは行動の記述に適應されるものであつて、空間的な記述描写に補われて想像的思考を展開していく。Platon の対話や、Descartes の《方法叙説》などは、普遍的真理の探究とその論証を志向するものであつて、pleasure を目的とする文学作品として書かれたものではないが、特殊な出来事の物語りと記述を通じて、自らの idea を展開していく過程の美しさは立派な文学的作品としての感銘を与えるものである。

要するに Poe が文学の中心に置いた a pleasurable idea とは、着想の面白さであると同時にその展開の美しさであり、それは着想の斬新さとその展開の創造性にある。創造的思考過程とは即ち想像力であり、語を概念から metaphor — image の方向へ引き戻して捉えながら、その概念結合に於て出来るだけ論理的説明をさけつつ、直観に近い時間的叙述即ち物語りと空間的記述即ち絵画的描写とによつて言語そのものの概念性、抽象的記号性を克服せんとするものである。言語表現に於ける概念的抽象性の克服は、概念の特殊化内包化であると同時に特殊と個別を普遍にまで止揚し典型又は象徴の形成を志向することであり、Hegel の所謂、具体的普遍 (Konkrete Allgemeinheit) に達することである。

言語は概念符号としての性格を有するものであるが、その概念の内包と外延は流動的であり、偶然的な連想をともなうと同時に、心理の陰影を深く刻み込んでいる。従つて厳密な意味での記述と説明は、数式と図解に代置されて行くであろう。唯、時間的過程に於て行為や出来事や又心理の変転を叙述する〈物語り〉に於ては言語表現を必要とするであろう。然し文学は歴史ではない。歴史は客観的出来事の〈物語り〉であるが、文学は意味の展開としての〈物語り〉であり、想像的思考の形成した世界なのである。fiction とはかかる意味である。歴史に於ける真実は対象の側にあり、文学に於ける真実は主体の側にある。従つて文学に於ける真実は、共感 (sympathy) なくしては成立しないものである。共感と云つても単なる感情的同意を意味するのではない。文学に於ける共感とは、説明し記述し結論を下すところからではなく、問題を示唆し、読者をも夫々の想像力に応じて言語創造の活動への参加を誘う魅力から生れて来るものである。言語芸術としての文学は感情ではなく想像であり創造である。又所謂私小説に於ける如き

人生体験の再現や報告でもなく、又<如何に生くべきか>と云うが如き人生哲学の探究でもない。言葉に斬新なる意味を与え、言語と思想とを新たなる生命と秩序に於て概念符号の世界から解放することこそ言語芸術家の仕事の中核である。

言語に於ける概念性克服の方法としての比喩の意味については上述した。比喩とは、表現の間接性を云う場合もあるが、文学作品に於ける *metaphor*, *allegory*, などは、意味内容が必然的にそれらの表現形式を要求するのであつて、その意味の概念的説明を拒むものである。文学に於ける象徴の意味もここにある。I. A. Richards などの如く、記号と象徴とを同一視すべきではない。文学に於ける象徴の意味は概念記号としての言語の克服にあると考えるべきである。この意味で、言語芸術の精神は象徴にあり、意味の美学は象徴の美学ともなり得るのである。これは言語による新たなる認識の創造に関する美学でもある。概念的、抽象的には限定され得ぬ意味、記述的説明的にも分析され得ぬ意味の無限性は、必然的に、概念的で有限な言語手段に於ては比喩、象徴、暗示の表現形態を要請するのであつて、これは感情の問題ではなく本質的な問題なのである。

V 意味領域としての言語美

美は意味の世界であつて、外部的对象の世界ではない。対象は、主体によつて意味を附与される場合にのみ美となり得る。従つて文芸に於ける写実主義 (*realism*) と呼ばれるものも、対象を単に克明に写すものと考えてはならぬ。文芸の歴史に於ける *realism* の意義は固定し概念化した観念世界の意味の打破にあつたのであり、対象に即することによつて新たなる意味の形成を志向するものであつた。《ボヴァリー夫人》の面白さは、その写実力にあるのではなく Flaubert がその対象に如何なる意味を浸透させているかにある。彼に於ては写実的手法は概念的説明を克服し、その具体的叙述は暗示と象徴にまで深められている。Baudelaire などの詩に於ける象徴主義が、<心の風景>によつて暗示した意味の世界を Flaubert は外部的对象の綿密な描写によつて象徴したとも云えよう。

Kant は趣味 (美的) 判断を規定する満足は一切の関心を離れたものとし、関心 (*Interesse*) を定義して、対象の現存在 (*Existenz des Gegenstandes*) の表象へわれわれが結びつける満足であるとする。かかる意味での関心は対象に対する欲望や利害とからみ合っている。

然し一体<美>とは何であろうか。美に対しては幾多の説明と定義が成立することであろうが、美とは結局美的欲求を充たすところのものであつて、それ以外の欲望を誘発するものではない。それは何らかの目的に対する手段ではなくして、それ自身に於て完結した世界でなくてはならぬ。それ自身目的であり手段でなくてはならぬ。それ自身の内部価値によつて形成され律せられるものであつて、そこに芸術の自律的な創作の領域が開ける。更に云えば、美とは対象化される客体ではなくして、主体の美的欲求に応じてのみ存在するものである。主体の美的欲求を前提としてのみ、美の生産 (創作) とその消費 (享受) が可能となる。美の生産とは、主体の内部にある *idea* に肉体を与えようとする意味活動であり、美の享受とは、その作品の創造の過程に参加し、制作の体験を共にせんとする意味活動である。従つて、享受が、受動的観照的立場に留る限り作品の理解

は不十分に終るであろう。芸術美とは異質的な自然美も、主体が自然の一角に附与したものであつて、主体に於てのみ成立するにすぎぬ。美は、受動的観照や感情に於て体験されるものではなく、自由なる創造行為に於てのみ了解されるものである。ここに従来の所謂哲学者の間に於て「美学」と呼ばれて来たものの多くが、芸術や美そのものとはかけ離れた観念の体系に終つた理由が見出されるであろう。美や芸術の科学、即ち美と芸術の一般化、概念化、はそれ自身矛盾である。Kant に於ても、美に於ける合目的性が想像力と悟性、時間と空間との認識能力相互の適応と云う立場に於て解釈せられ、美が専ら観想的享受に属し、能動的創造行為に属して捉えられなかつたし、美学の批判主義的建設に當つても作品観照の知的分析を反省判断力の感情的評価に結びつけるに止ることになつたのであり、かかる「美学」に対する Paul Valéry の不満は芸術家として当然の理由を有するものであろう（田辺元：ヴァレリーの芸術哲学、第一章）。

要するに美への欲求（want）は美の欠乏（want）と同一の根源を有するものであり、欠乏なくして欲求も充足もなく、欲求なくして生産と創造は考えられない。欠乏と欲求と生産と充足は、円環をなして存在するものであつて、これを分離して考えることは不充分である。従つて芸術は遊戯でもなく、又 *Interesselosigkeit* に於て成立するものでもなくして、現実に対する激しい関心と虚無感の鑄型から打出されて来る精神の姿に外ならない。唯その目的を自らの中に内包する行為である点に於て遊戯に類似するにすぎない。

美への要請は現実の欠乏感から来ると述べたが、これは精神病理学的にも説明されるものであつて、他の充たされぬ欲求の代償（compensation）と見なすことも出来よう。然し私は、美への要求の本態は、人間の形而上的要求として考えたい。それは、人間の芸術活動が、人間の意味活動の一部門であり、意味活動の根源は現実の無意味さに耐えられぬ欠乏感であり、虚無感なのである。芸術作品はまさに形而上学的人間が虚無に抗して描いた感性的自画像なのである。これは人間の存在そのものが欠如であり、無意味な空間と時間の谷間を死に向つて流れていく不条理な意識と肉体の結合に外ならぬからであろう。

意味の美学とは、結局現象としての文芸作品の制作過程に身を投入し、その根源を人間の意味行為とその意味形態の中に探ることに外ならぬ。

今や、具体的な文学作品を取扱うべき段階とはなつた。然しそれは、この小論文とは別個の形態をとることを要求するであろう。この小論文は、言語芸術としての文学をば、創作に於ける主体的意味行為の側から捉えんと試みたものであつて、客体としての作品の形態の側からの考察、即ち文体論と相補うことによつて言語美学の基礎理論を形づくる筈のものである。そこにはじめて言語芸術としての文学作品の美学的考察の領土が展開され得るであろう。

Summary

Aesthetics of Meaning in Language

Katuo MOROZUMI*

(Department of English Literature, Faculty of Liberal Arts and Science)

My intention in this essay is to consider the ground for the aesthetics of language. Language consists of sounds and conceptual meanings. But in language musical elements are subsidiary to conceptual meanings. And this conceptual character of language is one of the greatest obstacles which literary writers must overcome. Hence figurative expressions—metaphors, images, and allegories are required. These symbolic expressions make meanings in language intuitive, vivid and intensive. And we can say successful symbols only come from the combination of the general and the individual in meaning. On this the success of literary works depends and the creative principle underlies it.

* Assistant professor of Shinshu University